



沖

俳句雑誌[おき]

2月号

沖 発行所

列島の反り

能村 研三

句集出版

先日の「沖の新年大会」では、新年の懇親に加えて、昨年一年間に「沖」の会員、同人で第一句集を出版された方を祝う会も合わせて行った。以前は新年会とは別に「出版記念会」を独立して行った時期もあったが、ここ数年はこの形をとらせていただいている。

一人の俳人が句集を編むことは大変エネルギーがいることで、その出版を決意するまでは勇気もいることだ。句集は個人の句がまとまった形で編まれているものなので、いつもの雑誌で見ている時の一句一句とは違う感触を得ることが出来、それぞれの作家の個性といったものが掴める。

しかし最近では、「沖」の仲間が句集を出版しても、会員が特段に興味を示す風潮にないことも確かで残念である。活字が溢れすぎているための現象とも思えるが、もっと、一人一人の作家の句集にも関心をもっていたらいいと思う。

昔は、仲間が句集を出版すると、親しい人たちが集まって、その出版を祝うというより、「著者を囲む会」というものをやっていた。飲み食い

木更津吟行 二句

椎 茸 の 褥 林 の 薄 日 差 し

遠 来 の 楯 の 茸 種 冬 う ら ら

列 島 の 反 り を 極 め て 寒 波 急

古 地 図 手 に 大 年 の 街 歩 き け り

壁 炉 照 る 万 年 筆 の 太 字 書

雪 し ま き 自 己 更 新 の ち か ら か な

緞 帳 の 真 裏 に あ り し 「 火 の 用 心 」

襟 立 て て 気 圧 の 谷 の 通 過 中

罅 黴 も 生 さ ぬ 餅 と や も の 足 ら ず

盃 洗 の 銀 の 内 張 り 年 酒 く む

が中心でなく、集うものが対象となる句集をしっかりと読んできて、その十句選などを持ち寄り、お互いの意見を述べ合う会である。

「沖ルネッサンス」を提唱して久しいが、こういって会が自主的に復活してくることも大変勉強になるように思うのだが。

最後に、今年の新年会の出版記念を祝うコーナーで、それぞれの著者に贈った私の祝句を紹介する。

廣島泰三句集『銀板写真』
樗や古き写真に明治の世

松本明子句集『花いばら』
異郷なる荒海佐渡を恵方とす

古屋元句集『都会歳時記』
メタリックな都会風景初御空

小澤利子句集門『桐の花』
冬潮にこころ癒さる房暮らし

能村 研三

蒼茫集



真 北 大畑善昭

禍も福もありたる年を惜しむかな
新曆真北より刻うごき出す
初夢や夢の録画も撮れるなら
金銀の葉の句集読み初めに
内々の二日の枕経ありき
北嶺も南山も雪来る頃か

自我の色 菅谷たけし

自我のごとき色生る菊の蕾かな
銀杏降りをりビル裏の喫煙所
一日は自愛のねむり風邪の床
風邪癒ゆるまづは髭剃ることをして
猫好きの文人住みき冬日向
綿虫の群れに中心なかりけり

熱きもの 千田 敬

寄鍋や円坐といふはよく笑ふ
枯野中いま目つむれば消えさうな
大楯やちろちろちろと刻を舐め
燃えくづる楯は山恋ふ華となる
北風吹く夜弔辞にもらふ熱きもの
冬うらら師の句碑影と吾の影と

昇るほど 大橋 俊彦

目をこするまでは居たはず雪女
完璧に保護色となり雪女
狐火や交番出払つてゐます
走り根を足裏にとらへ冬の旅
昇るほど池深くなる冬の月
討入の日や採血の順を待つ

拡大解釈

久染康子

秩父夜まつり尾根に揺るるは狐火か
新走の表面張力啜りたる
裸木に鋼の気負ひありにけり
空よりも斜面明るき落葉山
煤逃げを拡大解釈して機中
歳晩の湯屋の高窓気炎吐く

鼠走り

千田百里

鼠が哭くよレノンの曲聴けば
マフラーに顎埋め予報士は戸外
鉄壁をなすや北山杉の凍て
ややありて楷火の鼠走りかな
一灯は暖炉にて足る山小屋は
封人のごとく鷹舞ふ竜飛岬

荊冠の煤

荒井千佐代

小雪や出船の笛の峰越えて
暮れ際の海の凧ぎたる雪ばんば

聖樹の星へみどりごを差し上ぐる
数へ日のちちの櫂に凭れけり
修道士まづ荊冠の煤払ふ
礁ひとつ波に攻められ小晦日

押への竹箒

望月晴美

朴落葉寄せて押への竹箒
冬ぬくし師の句師の文字師の姿
一色はどこか明るし大枯野
炬燵守り反骨萎ゆることおそる
ひとり身の自由不自由十二月
気のすむまで冬のふらこ漕いでをり

霜月鱧

北川英子

北窓の夜景の彼方雪来るか
霜月鱧若狭の風に透き通り
寝台車に醒めどこまでも雪景色
寒灯下ひたすら水の流れ過ぐ
とてもきれいよ霜の夜の枢窓
昨夜捨てし憂さも凍結してあたり

冬の虹 細川洋子

翻訳は創作に似て室の花
猫の鼻ほどの冷たさ姫椿
冬の虹かかりて父の忌の近し
風呂吹のふつくらとせし自愛かな
北窓を塞ぎ頭蓋に手術痕
乳堅く挟む健診雪催

トランプの付き 藤原照子

はらからの七十路八十路衣被
溪流に落ちて木の葉の旅はじめ
起きぬけの禰宜のジーンズ落葉掃く
半身に棲みつく痛み冬の月
服薬のための三食室の花
夜の雪トランプの付き回り来し

イマジン 楠原幹子

街騒のなかにイマジン十二月
十二月八日その年に生まれけり
煮凝やはみ出してゐる憤り
静電気びびつと指に猟期来る
柀の花の香ちよさん逝かれけり

慰むるはずが慰められて古酒

もう家に 辻美奈子

土のこと言ふ大根を持つて来て
白鳥を待つや水面をたひらかに
もう家に帰れと釣瓶落しかな
うぶすなの土よく乾く桑枯れて
帯解や解かるるものに臍の緒も
ふとわれを置き去りにして毛糸編

凍蝶 森岡正作

凍蝶の家紋のごとくありにけり
猟期来る帽子目深な男増え
三つ目の咳は空咳吉良屋敷
数へ日の貧乏揺すりと隣り合ふ
折れ釘に袖取らるるも十二月
煤逃げの天気予報は確と見る

まばたけり 田所節子

十一月日ざしの方へ座を移し
かたことに利発さ見えて竜の玉
思ひ出を消しセーターを編み直す
電飾に個性奪はる冬木立

凍る凍ると電飾のまばたけり
霜の夜の砂糖被せおくジャム作り

火の見櫓 辻直美

初明り世にある側に目覚めたる
あのころの火の見櫓よ開戦日
聖樹運ぶ星のさざめく音させて
歳晩や炎なき焼炉の火の加減
蕎麦搔や父の流儀に倣ひたる
拍子木を真ん中にして夜番過ぐ

使者の顔 吉田政江

西の市笑顔の中を通り来る
須賀川は遠し狭庭の牡丹焚く
放し飼ひの卵を探す小春かな
ポインセチアどこに置いても使者の顔
煤逃げの大義どこかで変わりけり
家中の機器点滅す冬の雷

予約席 松井志津子

啼く声の風に千切れて冬かもめ

干し魚を程よく炙る一葉忌
予約席ポインセチアで仕切らるる
籤売の正で数へる十二月

冬ざるる木目あらはな出土舟
夫がりへ翔けつつあらむ冬夕焼
智・ちよきん

藁あと 宮内とし子

吊されし藁あと残る凍豆腐
冬に入る西洋人形捻子秘めて
釣瓶落し碇泊灯のうす紅に
衣被歌舞伎もどきの早変り
風遊ぶ芒野にゐて酔ひごち
櫂枯る鳥一羽の句読点

翁忌 遠藤真砂明

木枯一号東京の星を研ぐ
岩を打つしぶきにおくれ冬海鳴り
隼の高さで岬鼻に立つ
神木の洞に一千年の冬
薪割りの斧を冬日へ振りかぶる
海暮るるまで翁忌と知らざりし

潮鳴集



木の葉

掛井広通

反らす身は日本の角度冬に入る
木の葉めく我へ木の葉のふりやまず
屋上に残る自動車冬の星
骨折の母と聖夜を過ごすなり
子の描きし大き煙突クリスマス

釘

和田満水

十二月八日釘かファスナーか
柗の香星の探せぬ街となり
越前の晴の悦び濤の花
昼暗き冬かみなりの日本海
短日の代引きといふ届き物

スー・チーさん

鳥居秀雄

嘶家は幼なじみや酉の市
黒板に冬日のさして師の忌日
小春日やスー・チーさんの髪飾り
漁りしもの輝かせ冬の鷺
泣くときの型のいろいろ近松忌

寄附箱

岡部玄治

低き軒連ね冬至の旧街道
よく晴れて自づから威の雪の峰
底厚きコップ歳暮の酔ひ早し
寄附箱に釣銭入れて年送る
うつ伏せに流れてゐたり除夜の川

沖作品



能村研三選

東京

阿部眞佐朗

抽斗に母を忘れぬひび葉
熊鈴は落葉の海に漂へり
返信はウイのひとつ冬に入る
冬ざれや閉ぢて久しき鍾乳洞
雲海の上の音降る冬野かな
蠟螂の枯れ拒むやう容るるやう
大き葉に雨音ひとつひとつ秋
保線夫の馴染みし山河秋晴るる
師句六千読みつぐごとく林檎剥く
茶が咲いて夕日ほぐれてをりにけり
鼓笛隊の肩章ひかり小春かな
枯園やひかり集めて力秘め
郷曲の語部の黙榎あかり
ほほかぶりの似あふ跡取り寡黙なり
酢海鼠の長さは知らず盃交す

千葉

鶴見 遊太

上田 玲子

東京

能美昌二郎

新松子夢はでかいがまだ青く
酒一合 塩少々と衣被
秋寒や歩幅は犬にまかせをり
潮騒は空より発し鬨雲
島国に港はあまた小鳥来る
初鴨や風切羽の青ちらり
厄介な旧かな遣ひ一葉忌
ひと口は何もつけずに新豆腐
賑はへる鴨着陣のけさの池
銀杏落葉踏みて分限者心地かな
山峡の空狭くして天の川々アメリカノリスカコライチ
子規集の金文字硬きそぞろ寒
薄茶飲む窓に差し込む柿日和
つらつらと思ふことあり盆の月
早口のカントリーソング秋暮るる

埼玉

大石 誠

鈴木 一広

沖作品 15句選評

*
能村研三

抽斗に母を忘れぬひび葉 阿部眞佐朗

この句の面白さは、中七の「母を忘れぬ」の「を」にある。これが例えば「母がわすれし」「母のわすれし」であったら一転してつまらない句になってしまう。「母が忘れし」「母の忘れし」であったなら、母が主体となるのだが、この句「母を忘れぬ」とあるから、ひび葉が主体となっている。助詞の一つでこんなにも句の意が変わってしまうものなのだ。抽斗の奥に仕舞われたままのひび葉であるが、いつの日かそれが出てきた。しかしそれを使うべく母はもういない。母には苦勞をかけ、ひび、あかぎれに悩まされながらも自分たちを育ててくれた母に改めて感謝の気持がおこった。

蠅螂の枯れ拒むやう容るるやう 鶴見 遊太

蠅螂の寿命は一年で、秋に卵を産むと生涯を終える。枯蠅螂とは、最後まで生き残った褐色のカマキリのことで、秋が過ぎて、カマキリの棲む草むらが枯れてくると、緑色のカマキリは天敵に見つかりやすくなるので、体の色を褐色に変えるという

説もある。冬になって欲の全てが消え去り動く事さえままならぬカマキリを見ると哀れを誘う。あとは生きるという事のみ。この句は、その蠅螂の逡巡を「枯れ拒むやう容るるやう」と表現した。

郷曲の語部の黙楯あかり 上田 玲子

「郷曲」は「むらやと」という意だが、東北地方では昔から囲炉裏を囲んで民話や昔話を語部が語るのが盛んである。うまい語部である、話の問合の呼吸も心得ていて明瞭に聞くことが出来る。話の途中の黙の瞬間、囲炉裏の楯がばちばちと音を撥ねて燃え盛り、語部の頬には楯あかりが映りいよいよ語りも佳境に入ってきた。

新松子夢はでかいがまだ青く 能美昌二郎

新松子は、その年に新しく出来た松かさのことで、まだ青く硬い。熟すると茶褐色に変り鱗片を開いて種子をこぼし、くすんだ色ながら清新の雰圍気を放つ。作者もまだ若い時にはいると理想を抱き、その夢に向かって邁進した時があった。世間の厳しさなど全く理解せずに、その反動で挫折も味わったこともある。今は後輩たちが育って、夢を大きく描く若者にかつての若い自分を見ているような気持になった。

銀杏落葉踏みて分限者心地かな 大石 誠

分限とは、ここでは金持、資産家という意味だろう。銀杏並木の落葉道を歩くと銀杏落葉の真つ黄色の絨毯の状態であった。銀杏の落葉の厚みは、厚い所では二、三センチもあり、歩いて行く程にとても良い香りがして来てふかふかと歩けば、至福の心地にしてくれる。少し時間にも余裕があれば、分限者の心地にもなるのだろう。

(以下略)